

令和6年11月29日

須賀川市議会議長 佐藤 瞭二 様

日本共産党須賀川市議団
代表 横田 洋子



視 察 研 修 報 告 書

先に実施した視察研修概要について、下記の通り報告いたします。

記

- 1 期日 令和6年11月7日(木)から令和6年11月8日(金)
- 2 視察先及び視察内容
 - (1) 山形県高島町 高島町観光協会
「まほろば冬咲き牡丹と牡丹園を通じた観光の取り組みについて」
 - (2) 山形県東根市
「子育て施策について」
- 3 参加者 横田洋子(代表)、堂脇明奈
- 4 概要 行政調査日程及び調査内容は別紙添付資料のとおり



「まほろば冬咲き牡丹と牡丹園を通じた観光の取り組みについて」

- 1 日時 令和6年11月7日(木) 午後1時30分から3時まで
- 2 説明者 一般社団法人 高島町観光協会 専務理事 土屋 浩二
主任 藤田 修平
- 3 説明内容 高島町観光協会と観光について及び
「まほろば冬咲牡丹まつり」についてパワーポイントで説明を受ける
- 4 質疑応答
問 四季を通じた観光施策について
答 「まほろばの里たかはた」の観光資源を活かした観光と地域の産業振興を図る取り組みを推進。年間を通して誘客を図っている。
観光需要の変化をとらえ、個人旅行、インバウンドの増加などでニーズの多様化・細分化に対応できる取り組みを強化している。

問 牡丹栽培技術の継承をどのようにしているのか。
答 観光協会の職員が20年間担当している。当初は春の牡丹のみであったが、冬季の観光誘客の目玉にしようと、冬咲牡丹の栽培をはじめたが係となった若い職員のモチベーション維持で継続している。冬咲牡丹まつりに合わせるためには、温度管理が重要なので、昼夜を問わず作業をすることになる。
- 5 所感
＜横田洋子＞
本市同様に牡丹の町として認知度が上がっている高島町の観光誘客、牡丹栽培の技術の継承について視察を行った。
高島町は、牡丹と共にワイナリーのある町としても知られている。ブドウ栽培の盛んな地域であり、東北最大のワイナリーは1年を通じて観光客が訪れている。このワイナリーが高島町の観光誘客牽引の1つになっているようである。
2つめの牽引となっているのが、「高島町観光協会」の事業ではないかと思う。事業目的として10項目が定められているが、その中には「観光資源、文化財、観光施設の保護、保全」「観光資源の調査研究と利活用に関する調査」「観光誘客のための事業実施」などがある。職員17名、地域おこし協力隊2名で業務を行っている。指定管理者としてJR駅横の太陽館温泉・売店、道の駅たかはた、民俗資料館・有機農業体験交流施設の運営をしている。また廃線となった跡地を利用して桜を植栽し、6キロメ

ートの「まほろばの緑道」に約700本の桜を植栽、四季折々に楽しめる草花や果樹なども植栽されており、高島町の観光資源、町民の憩いの場となっている。これらのPR、維持管理業務を観光協会が担っており、創意、工夫と共に意欲的な取り組みが感じられた。町内全域の観光業務を自らの方針で実践していることは、須賀川市にはない観光協会のあり方ではないかと思う。

このような中、訪日外国人人数伸び率が、市町村別で第2位、伸び率64倍。また、観光誘客数もコロナ禍の影響から徐々に回復傾向にあり、令和5年度では80万人を超えた。その傾向で驚くべきことは、積雪の多い冬季を含めた年間の誘客数に変動がないことである。冬季の観光誘客の目玉が、2月に実施している「冬咲牡丹まつり」で、今年23回となった。観光協会の職員が昼夜を問わず、試行錯誤しながら実施期間に見頃となるようにビニールハウスの温度管理をし、藁でこもを作り展示をする祭りである。観覧は無料であるが寄付金を募り、維持管理費に充てている。

観光協会、町内会、商工会との連携で、「高島町観光PRイベント」には350人の申し込みがあり、インフルエンサーによるセミナーを開催していることもSNSの発信力に注目しているからではないかと思う。

企画やサービス、知識や技術の磨き上げを観光協会の業務としていることに学ぶことが多いと感じた。

今後の議会活動に活かしていきたい。

<堂脇明奈>

高島町では、観光需要の増加に伴い観光の目的や内容を吟味し、常にイベントの企画を検討している。検討の大切な柱は、一つは、個人旅行、インバウンドの増加によりニーズが多様化・細分化されていること、もう一つは、テーマ性が重要視され、地域ならではのモノや体験に対するニーズへの高まり、SNSの投稿をきっかけとしていることであった。令和5年からは、台湾でインバウンドを主としたプロモーション事業として観光PRイベントを開催している。他にも、県内はもちろん隣県である福島県でも数多く実施し、ほかにも県外に向けた観光PRを積極的に行っている。

高島町では、最も力を入れているイベントが「まほろば冬咲きぼたんまつり」の開催である。冬にも集客できる観光イベントを検討する中で「冬咲きぼたん」に注目し、平成14年からを開催している。

冬咲きぼたんは、ぼたんの開花を遅らせることで冬に咲くようにして展示されている。展示が終了したら鉄道沿線にある牡丹園に移植し、また違った牡丹の風景で訪れる人を楽しませている。開花を遅らせるには、「抑制栽培」と「促成栽培」という二つの栽培方法を用いている。その作業を行っているのは、観光協会の方々であり、専門家と密接に連絡をとり助言を得ながら育てている。長年の経験と栽培に携わる職員とで次の世代への引き継ぎも含めて、経験を蓄積しながらイベント成功のために努力していた。植物を通常の時期に開花させることにも細心の注意を払うことであるが、季節の全

く違う寒い時期に咲かせることは、気候変動の激しい近年ではより難しく、より手間と時間がかかることである。自然を相手にする仕事は、早期からの次世代への技術継承が必要であると感じた。

冬咲きぼたんをさらに発展したイベントにするために、地元の高校や芸術大学、町内の若者団体や地域の方々に協力を得ながらより幅広い世代が楽しめるように企画している。また、高校生や大学生が参加することで新しい発想でイベントを盛り上げている。特に、次世代を担う高校生の参加については、訪れた人にアンケートをとりながらのインタビューの実施により様々な人と対面で話すことでコミュニケーションの大切さを実感し、地元の魅力を再認識してほしいとの期待が込められている。

今回の視察で驚いたのは、一年を通してどの季節でも集客数がほぼ同じであるということである。本市においても、牡丹園をはじめに様々な観光についての集客には課題があると考え。市民に向けたシビックプライドの醸成や魅力再発見の事業を展開しているが、さらに発展していくことが必要である。市民が市の魅力をより多く対外的に発信していくことができるようにすることで新たな集客がつかめるのではないかと思う。そのために、市民が是非とも発信したいと考えるものを市民の意見を交えて発掘し、作り出していくことが必要と考える。

イベントの様子



「東根市こども・子育て施策について」

- 1 日時 令和6年11月8日(金) 10時から11時30分まで
- 2 説明者 健康福祉部 健康推進課 課長 後藤 光
こども家庭課 課長 早坂 康
- 3 説明内容 パワーポイントで、子育て支援によるまちづくりについて説明を受け、「さくらんぼtantokulセンター」に移動し、説明を受ける
- 4 質疑応答
問 充実している施策を実施している中で、課題はどのようなところと考えているか。
答 臨床心理士、保育士、看護師などの専門職の職員を確保することが困難である。
問 「ひがしねあそびあランド」と「さくらんぼtantokulセンター」を子育て支援施策の中で、どのような位置づけをしているのか。
答 屋内版子どもの遊び場「けやきホール」を有する「さくらんぼtantokulセンター」が子育て支援の拠点として機能する中、外で思い切り体を動かして遊ぶことができる場所が求められるようになり、子どもたちの心身の健全な発達と成長を促すための施設として屋外遊び場「ひがしねあそびあランド」を整備した。

5 所感

<横田洋子>

東根市の定住人口は昭和55年からの国勢調査によると右肩上がり増加、平成27年度から令和6年度までは横ばい状態となっている。合計特殊出生率をみると全国、山形県と比較しても、平成24年から11年間常に上回って推移している。さらに生産年齢人口も昭和55年から大きな変化がみられない。これらは、自衛隊の基地があることも考えられるが現市長の「子育て世代に特化した施策の実行」で勢いのあるまちづくりを目指してきた結果ではないかとの分析がされている。

平成20年から父子家庭医療費無料化、小学生の入院医療費無料化など「子育て応援5つ星事業」を実施。

平成22年からは「子育て応援マニフェスト2010」として屋外版こども遊び場「あそびあランド」を創設し、無料で遊び場を提供し、プレイリーダーが常駐し子どもの創造性・自主性を引き出す役割を果たしている。この「あそびあランド」と共に屋内遊び場

「さくらんぼたんくるセンター」が東根市の子育て支援のシンボルとなっている。また、こども医療費無料化の拡充を実施。

令和元年からは、新5つ星事業によってさらなる子育て応援事業が拡充されている。

令和6年からは4つの新規事業の開始と3事業の充実が図られ、中学校給食費の無償化が開始されている。

このように子育て応援策の新事業、拡充が確実に計画・実施されているが、「子育て世代から選ばれる自治体になるために」との明確な目標を示し、知恵を絞り創意工夫を図るとともに、より広域的に住民利益を尊重し、地域や近隣自治体で連携して地方を創生していくかが試されているのではないかと、これからも、あらゆる可能性を追い求めることが肝要であるとの考えが示された。

明確な目標と実現のためのビジョンを持ち実現してきているが、財源確保が大きな課題となっている。

まちづくりにとっての子育て応援施策の位置づけと将来のあるべき姿を明確にしたビジョンを持つことで財源確保が明らかになるのではないかとと思う。

今後の議会活動に活かしていきたい。

<堂脇明奈>

東根市は、子育て世代に特化した施策を講じ、交通網や就労場所の拡大など生活環境の整備を進めたことで活力あるまちへと変わり徐々に人口が増加している。また、子育て支援策を一つ実現したら次へと新たな支援策に取り組み、着実に子育てしやすいまちへと発展を続けている。

現在は、次世代を育成する「教育による『人』づくり、人が『まち』をつくる」をコンセプトにして「教育によるまちづくり」に取り組んでいる。一つは、県立の中高一貫校の誘致とともに公益文化施設「まなびあテラス」の開設である。「まなびあテラス」は、図書館、美術館、市民活動支援センターの機能を集約した施設で新設した中高一貫校の隣りにあり学生が利用しやすくなっている。もう一つは、「さくらんぼtantクルセンター」の建設であり、この施設は、総合保健福祉施設として休日診療所や保育所が入っているほか、屋内大型遊戯場、総合診察室、会議室、教養娯楽室、大ホールなど、子どもから高齢者まで多くの市民が集える特色ある複合施設となっている。そこには、市のこども家庭課、健康推進課が入り、子育て相談の拠点ともなっている。特徴的だったのが、保育所が併設されているため、施設内から園庭で遊ぶ子どもたちを見ることができるところである。子どもたちの活動する姿が見えることで地域全体で子どもたちを見守り、育てる意識が培われるのではないかと考える。さらに、特徴的な施設として屋外に広々とした子どもの遊び場「あそびあランド」がある。子どもたちが自分たちだけで来て遊べる施設で、どろんこ遊び、木片工作、火おこしなど、子どもの自由な発想で主体的に遊ぶことができる。ここに携わる大人たちは、子どもたちの遊びの要求がかなうように助言す

るとともに安全に遊べるように補佐する役割を担っている。あくまでもここでの主体者は子どもたちである。外遊びの大切さを通じて子どもの自主性を尊重し、創造性を養う施設になっている。

財源を生み出す工夫としては、主に民間の力を活用することであったが、公的に必要なものは公的運営で行うことで市民サービスの向上を図っている。その例として、保育所、こども園では民営の施設もあるが、多様化する保育ニーズへの対応として医療的ケア児の受け入れができる公設公営のこども園を整備している。支援を必要とし子どもの特性に合わせた保育が実施できる施設は、公営だから安定した経営ができ預ける保護者も安心である。本市においても民間活力の活用が進められているが、公営だからできることはしっかりと残していかなければならないと考えた。

様々な支援策や施設は、子どもを真ん中において子どもを中心とした事業となっており、より良い子育て支援がされていると感じた。「住民が住む自治体を選ぶ時代」を念頭において創意工夫を図り、次代の担い手として活躍できるようにと先を見通した事業展開が選ばれるまちになっているのではないと思う。本市でも将来を見通した子育て支援策が必要であり、今回の視察を活かして提言していく。

